

題 目 4 形態の集団間報復がもたらす評判についての実証的検討

氏 名 佐藤興介

指導教員 高橋伸幸

なにか理不尽な攻撃を他者から受けたときに、その相手に仕返しするという行動を報復行動と呼ぶ。その中でも、報復する人とされる人がそれぞれ別の集団に属している場合の報復を、集団間報復と呼ぶ。集団間報復は、当初の危害の当事者ではない集団成員が関わるケースも存在し、そのような場合には、同じ集団に所属しているというだけで、次々と新たな人間を報復の対象者として巻き込んでいくという構造であるために、集団間報復は集団間コンフリクトを拡大させる要因の一つであると考えられている(神, 2001)。集団間報復は、報復する人が当初の危害の被害者本人である場合と、被害者と同じ集団に属する別の人物である場合があり、報復の対象となる人物についても同様に、当初の加害者本人である場合と、加害者と同じ集団に属する別の人物である場合がある。そのため、誰が誰に報復するかという観点で分類すると、想定される集団間報復のパターンは 4 種類となり、先行研究ではそれぞれ異なる理論によって生起メカニズムが説明されている。一般的に報復行動は望ましい行動とは見なされず、集団間報復においても同様であると思われる。しかし、それに関わらずそうした集団間報復が存在しているならば、報復する人にとって、何らかの客観的メリットがあると考えられる。その一つとして、報復行動によって内集団成員からよい評判を得ることで、適応的な行動として成立しているという可能性がある。本研究の主目的は、集団間報復を行う人物が内集団成員から得られる評判について、直接比較検討することとした。また、先行研究では集団間報復動機を促す要因として内集団同一視が考えられているが、逆に「外集団成員から、自分が内集団の一員であると捉えられているだろう」と報復する人がどれだけ信じているか、という要因である可能性についても検討した。本研究ではシナリオ質問紙を用いて、4 種類の報復パターンそれぞれにおいて、報復を行った人がどのような評判を得るのかについて比較検討した。結果として、質問紙で用いた 2 種のシナリオ間で結果は大きく異なったが、当初の被害者本人が報復する場合と、被害者とは別の内集団成員が報復する場合との間に印象評定項目や内集団同一視についての項目、動機推定項目において違いが見られた。本研究の知見は集団間報復研究について、その意義という観点から一定の視座を与えるものであると考えられる。